



マーライオン（シンガポール）
（撮影：徳真会グループ 代表 松村 博史）

百年の大計

— 人財育成と国家の盛衰 —

国力

Vol. 60

小都市国家ながら、洗練された発展を遂げてきたシンガポール。

2019年のコロナ禍直前の訪問以来、久しぶりに親しい友人の招きで伺いました。

今年 8 月 9 日が建国 60 年の「SG60」ナショナルデーという事で、その一大セレモニー前の準備が各所で行われていました。

シンガポールは 1965 年マレーシアから分離独立し、当時は英国植民地時代に建てられた歴史的建造物は残ったとはいえ、水も食料も近隣の国から買うしかない貧しい小さな島国でしかありませんでした。

しかし、リー・クアンユーという優れた初代首相が長期にわたり安定した統治を行い、以来 60 年間でわずか 4 人の首相による永続性有る統治が続き、驚くべき経済発展と内政安定をもたらしてきました。

常に将来を見据えた理想国家の創造へ向けて、国家戦略を一貫して実践してきた結果、かつての貧しかった東南アジアの小国は、世界一の空港を持ち、港はコンテナ取扱量世界 2 位、そして、金融ハブとして発展した国際金融センター、また知財立国として世界から優れた技術者、研究者や法人を集める等、常に長期的視野で戦略的国家運営を続け、驚異的発展を可能にしてきた訳です。

国防の備えも万全で、マレーシア、インドネシアといった仮想敵国に対して高い軍事力を有しています。

教育面でも高いレベルで知られ、全教科において世界 1 位となっています。

こうした空港、港、金融、知財といった外貨獲得産業の育成により国が豊かになった為、個人、法人の税率も低く、国外から優れた法人や人財が更に集まってくる国家を、わずか 60 年で実現した訳です。

党利党略ばかりで、長期的戦略や国家観の無い政治が続く日本は、かつてリー・クアンユーが学んだ国であり、また、日本の企業がシンガポールの発展に大きな貢献をしたにもかかわらず、今は逆にシンガポールから日本が学び直す段階にきている様に思います。

古語に

一年の計は穀を樹うるに如くはなく（一年先の事を考えるなら種を播け）

十年の計は木を樹うるに如くはなく（十年先の事を考えるなら木を植えよ）

百年の計は人を樹うるに如くはなし（百年先の事を考えるなら人を育てよ）

という言葉が有ります。

国家という大樹を育てるには、まず長期的視野に立って人を育ててゆく必要が有り、今日の人財育成こそが、未来の日本を再び世界の範たる国家へと導く道だと思いつつ帰国の途に就いた次第です。

徳真会グループ
代表 松村 博史